

陸機「文賦」の文章について（上）

福井佳夫

陸機、あざなは士衡（二六一―三〇三）の手になる「文賦」は、文学創作のプロセスを賦の形式で記述した作品として、あまねく知られている。その内容のせいか、この賦は文学論ふうの著述だとみなされ、文学理論の発展史を考究するさいの資料として、利用されることが多かった。なかでも、同篇ではじめて言及された、詩の縁情説や声律説などは、文学理論史上でも著名なトピックとなつて、唐宋以後の詩論家や文芸評論家はもとより、

近現代の研究者たちにおいても注目され、さまざまに議論されてきたのである。

だが、いうまでもないことだが、陸機「文賦」は、そうした文学理論史上の重要資料である以前に、一篇の賦作品でもある。しかも、その「文賦」の行文たるや、当時の水準からぬきんでた華麗な美文であり、その文学的な価値も、また正当に評価されねばならない。にもかかわらず、これまでの「文賦」研究では、一篇の文学作品として検討する姿勢が、じゅうぶんではなかった。これまでかかれてきた「文賦」関連の論文は、日中とも、お

おむね文学理論史上での意義や価値を論じたものであり、「文賦」の行文や修辞の特徴をとりあげて、たんねんに分析した論文には、「注釈や翻訳はべつとして」あまりお目にかかれないのだ。

一例をあげよう。「文賦」の研究史を論じた最近の論文に、李天道「近十年来陸機〈文賦〉研究綜述」（『西南民族大学学报』二〇〇五―一二）という篇がある。この論文は、六つの章からなるが、その各章の標題をあげてみると、一、関于縁情説 二、関于感物説 三、関于心遊説、四、関于意説 五、関于風格説 六、関于綺麗説――である（傍点は筆者）。すぐわかるように、これら六章の標題は、どれも「文賦」中の文学理論に関するターム（傍点）であり、「文賦」じたいの修辞の特徴や文学的価値を論じた章は、たてられていない。これは、李天道氏の見かたが偏向しているのではなく、じつさいの研究動向がこのとおりだったのであり、それを忠実に反映しているのだろう。こうした、研究史の標題の立てかたひとつとっても、じゅうらいの「文賦」への関心は、文学理論史上での価値や位置づけのほうにあり、「文賦」じたい

の行文や修辭には、あまり注意がはられなかったことが推測されてくるのである。

従前のこうした研究動向は、じつにもつたいないともう。この「文賦」は、拙稿「陸機文賦札記」（以下、前稿と称する。「中京大学文学部紀要」第四四—二二〇一〇）なお、本稿での「文賦」原文や訳文、分段等は、前稿のものにしたがう）でも考察したように、一篇の賦作品としてみても、燦然とした輝きを発する名篇であるからだ。六朝美文を代表するこの名作を、すぐれた文学として鑑賞することなく、ただの資料としてほっておく手はないではないか。そこで本稿では、「文賦」の文学理論史上での意義はさておき、もっぱら六朝期にかかれた一篇の賦作品とみなして、その文章の特徴や文学的価値をあきらかにしてゆきたいとおもう。

一 六朝での評価

「文賦」の文章を考察するまえに、じゅうらいの「文賦」評価をふりかえっておこう。まず六朝期においては、どんな評価をうけていたのだろうか。

ごくおおざっぱに言えば、「文賦」は六朝期においても、やはり一篇の賦作品というよりは、文学理論を叙した作だとみなされていたようだ。たとえば、

(1) 陸機文賦、通而無貶。（鍾嶸「詩品序」）

陸機「文賦」は、ゆきとどいた作ではあるが、作品

批評がない。

(2) 陸賦巧而碎乱。《文心雕龍》序志）

陸機「文賦」は巧妙ではあるが、煩瑣で混乱きみである。

(3) 昔陸氏文賦、号為曲尽。然汎論纖悉、而実体未該。

《文心雕龍》総術）

むかし陸機氏は、自分の「文賦」を「創作の妙訣をのべつくした」と称していた。しかし「文賦」はひろく細部まで論じてはいるものの、創作法の実体はまだかたりつくしていない。

などは、あきらかに文学理論の作として、「文賦」を評したものである。(1)は「文賦」が創作論としては周到な内容をもっているものの、具体的な作品批評がないと批判したものだろう。(2)はいっけん文学批評ふうだが、この部分の前後をみると、曹丕「典論」論文や摯虞「文章流別志論」への同種の評言がならんでいる。つまり、文学理論の作としては、「巧妙ではあるが、煩瑣で混乱きみ」だということであり、これも一篇の賦作品としての評価とはいいいにくい。(3)はあきらかに、文学理論の作としての評価である。この引用した部分のあと、「それにくらべて私の『文心雕龍』は云々」と議論がつづいている。この(1)く(3)の評言をみると、鍾嶸や劉勰らにとって、陸機「文賦」は文学批評の先駆的業績であり、尊敬の対象でありながらも、また好敵手だともうつつっていたようだ。

そうした「いわば同業者の」立場であれば、一篇の文学作品としてよりは、文学理論の作とみなさざるをえなかったのだらう。⁽²⁾

右は、どちらかといえは総論ふうな評価だが、具体的な文章技術ふう見地から、「文賦」中の議論を引用したり、また言及したりしたものもすくなくない。そうした例の代表として、従前からしばしば指摘されてきたが、沈約「宋書謝靈運伝論」と陸厥「与沈約書」があげられよう。

(4)「宋書謝靈運伝論」夫五色相宣、八音協暢、由乎玄黄律呂、各適物宜。

五色がたがいに輝きを発し、八音が調和するようにするには、色彩や音律が、対象にふさわしく適用されなければならない。

(5)「与沈約書」魏文属論、深以清濁為言、劉楨奏書、大明体勢之致。岵嵒妥帖之談、操末統顛之說、興玄黄於律呂、比五色之相宣。苟此秘未覩、茲論為何所指邪。

魏文帝は「典論」論文で、清濁の議論を展開し、劉楨も書を奏して、体勢の趣をあきらかに論じました。さらに「陸機「文賦」の」「岵嵒妥帖」の談や「操末統顛」の説がおこって、色彩を音律にたとえ、五色がたがいに輝きを発することになぞらえました。それなのに「この音律の秘奥には、だれも気づかなか

った」とは、いったいどういうことなのでしょう。

(4)は沈約が声律論を首唱した文として、とみに著名である。引用文中の傍点部は、「文賦」第六段の「暨音声之迭代、若五色之相宣……謬玄黄之秩敘」を利用したものだらう。また(5)の陸厥「与沈約書」は、沈約の「声律を発見したのは自分である」という主張に対し、過去の文人たちも気づいていたのだ、と反論した書簡文である。ここでは、そうした、声律に気づいていた過去の事例のひとつとして、「文賦」中の「或妥帖而易施、或岵嵒而不安」(第三段)や、(4)とおなじ「如失機而後会、恒操末以統顛。謬玄黄之秩敘、故渙浼而不鮮」(第六段)などが引用されている。

この(4)(5)は、声律発見に関する初期の資料だが、「文賦」の影響は、こうした声律の議論だけにかぎられるわけではない。沈約はこのほかに、「警策」の語も「文賦」第八段からまなんだようだ。彼の「報劉杳書」において、

(6)「報劉杳書」別卷諸篇、並為名製。又山寺既為警策、諸賢從時復高奇。解頤愈疾、義兼乎此。

「あなたがご惠贈くださった」別卷の諸篇は、いずれも名篇ぞろいです。わが山房には、こうした警策となすべき篇にめぐまれ、さらに良辰には諸賢がやってきて、高論を弁じてくれます。おかげで私は愉快になり、病気もなおりました。貴兄の名篇や諸賢

の高論には、こうした効能もあるのです。

と警策の語をつかつている。陸機は警策の語を、「文章全体をひきたせる重要な句」の意でつかっていたが、沈約はすこし敷衍して、「重要な作品」の意でつかっているようだ。こうした、ややずれた使用法も、ひとつの継承のしかただろう。後代、とくに明清の詩話などで、しばしば「文賦」に起源する修辭ターム、たとえば意不称物、文不逮意、縁情、綺靡、朝華、夕秀、窮形尽相、応感、辞達理挙などを使用するようになるが、これは、その最初期のものといえよう。

右のような、「文賦」中の文学理論ふう語彙を利用したケースをあげてゆけば、きりが無い。その種の例は、『文心雕龍』を筆頭にして、枚挙にいとまがないからだ。それゆえここでは、じゅうらいあまり指摘されていない、梁の蕭兄弟（昭明太子と簡文帝）の事例をあげるだけにとどめよう。この好文の兄弟は、ともに「文賦」を熟読していたようで、彼らの書簡文のなかにも、しばしば「文賦」中の語彙が登場している。

(7)「蕭綱と湘東王書」但以当世之作、歷方古之才人、遠則揚馬曹王近則潘陸顔謝、而觀其遺辭用心、了不相似。若以今文為是、則古文為非。若昔賢可稱、則今体宜棄。……故玉徽金銃、反為拙目所嗤。巴人下里、更合郢中之聽。陽春高而不和、妙声絶而不尋。

竟不精討鎔銖、覈量文質。

当世の作品を昔の才人、ふるくは揚雄・司馬相如・曹植・王粲、ちかくは潘岳・陸機・顔延之・謝靈運たちとくらべると、その表現や心遣いはまるでちがって「おとつて」います。もし今日の詩文をみとめるなら、昔の詩文は否定すべきだし、昔の文人を称賛するなら、今日の文風はすてるべきです。

……だから玉徽や金銃などの高雅な歌は、かえってつまらぬ連中にわらわれ、巴人や下里のごとき下品な歌が郢中で人気がでるしまつ。陽春は高雅であっても唱和されず、その妙声はきえてわすれられました。こうして人びとは細部まで検討せず、文質も考慮しようとしなくなつたのです。

(8)「蕭統と何胤書」但経途千里、眇焉莫因。何嘗不夢姑胥而鬱陶、想具区而杼軸。心往形留、於茲有年載矣。

千里もはなれていますので、お会いできる機会もありません。「貴兄のお住まいの」姑胥山を夢みては心が鬱々とならぬことなく、また具区の沢を想起しては気がふさがぬことはありませんでした。「お会いしたい」と心ははやっても、身体は移動できぬまま、今日まで何年もたつてしまいました。

両篇とも傍点を付した箇所は、「文賦」に依拠したものである。(7)の蕭綱は、「文賦」序文の「余每觀才士之所作、

窃有以得其用心。夫放言遺辭、良多変矣」、第十七段の「雖濬發於巧心、或受畝於拙目」、第七段の「考殿最於錙銖、定去留於毫芒」から、それぞれ語彙をもつてきている。

また(8)の蕭統は、「文賦」第九段の「雖杼軸於予懷、怵他人之我先」と、第十九段の「及其六情底滯、志往神留」から、やはり語句をもつてきて利用している。ちなみに、(8)の「杼軸」の語は、「上の(鬱陶)と文を連ぬれば、(鬱陶)の情、交_こも心に織_おれるを謂うなり」(兪紹初『昭明太子集校注』二一四頁)にしたがうと、ここでは「気がふさぐ」ぐらいの意で使用しているようだ。

この両篇のうち、(7)蕭綱の書簡文は文学論ふう内容だけあって、「遺辭」「用心」など文学理論ふう語彙がつかわれている。ところが(8)蕭統の書簡文では、(6)や(7)とはちがって、ふつうの用件でのふつうの用語として、「文賦」の語彙を借用しているようだ。こうした使用例も、「文賦」の広範な影響力をものがたるとかんがえてよからう。

さて、六朝期における「文賦」の評価のされかたを概観してきた。このうち(1)～(3)は、あきらかに文学理論を叙した作としての評価である。いっぽう、(4)～(7)のようなケースは、「文賦」への直接的な評価ではないといえるかもしれない。だがそうであっても、沈約や蕭綱らの作は、いずれも文学論に属する文章であることを想起しよう。つまり彼らは、「文賦」中の議論を、重要な文学理論ふう発言だとみとめたからこそ、おのが文学論中に言及し、利用したわけであり、これも、文学理論を叙した作

としての、好意的な評価だと解さねばならない。そして(8)は、そうした評価の延長上にあって、「文学論でない」通常の書簡文にも、「文賦」の影響がひろがってきた例だと解すべきだろう。これを要するに「文賦」は、当初から文学理論を叙した先駆的業績だとみとめられ(1)～(7)の例)、やがてそれ以外の詩文にも、徐々に語彙が浸透していった(8)の例)——という評価の変遷が推測されるのである。

では、「文賦」は一篇の文学作品とみなされることは、まったくなかったのかといえ、そうではあるまい(注2も参照)。ここまでは、「文賦」一篇にかぎった評価を概観してきたのだが、陸機の才能ゆたかさや、その文学の絢爛華美をたたえた褒辞は、六朝では枚挙にいとまがない。たとえば、

「北堂書鈔卷五十七・百引葛洪抱朴子」機文猶玄圃之積玉、無非夜光焉。……其弘麗妍瞻、英銳漂逸、亦一代之絶平。

陸機の詩文は仙居にしかれた宝玉のようで、夜でも光をはなためものはない。……その弘麗にして豊麗、かつ鋭敏にして飄逸なることは、一代の傑作だろうか。

「世説新語文学」孫興公云、潘文爛若披錦、無処不善。陸文若排沙簡金、往往見宝。

孫綽はいった。潘岳の詩文は、錦をまとったように

はなやかで、不出来の箇所はない。陸機の詩文は砂をよけて金をとりますように、しばしば宝石がみつかる。

「同右注引文章志」「司空張華」謂曰、人之作文、患於不才、至子為文、乃患太多也。

「司空の張華は」陸機にいった。ひとが詩文をつくる時、才能不足をなやむものだが、きみが詩文をつくる時は、才能のありすぎがなやみの種だね。

「詩品上品」其源出於陳思。才高辭瞻、舉体華美。

……其咀嚼英華、厭飫膏沢、文章之淵泉也。張公歎其大才信矣。

陸機の詩は、曹植に源流がある。才腕は卓越し文辞はゆたかで、そのスタイルはなべて華美をつくしている。……過去の名篇をよく咀嚼し、恵みを吸収しており、さながら詩文の淵泉というべきだ。あの張華が陸機の才能に驚嘆したのも、むべなるかな。

「宋書謝靈運伝論」降及元康、潘陸特秀。律異班賈、体変曹王、綱旨星稠、繁文綺合。

元康年間になると、潘岳と陸機のふたりが卓立している。その文風は班固や賈誼とことなり、スタイルも曹植や王粲とはちがっていて、すばらしい内容が星のようにつらなり、あでやかな文飾はあやぎぬのようにならんでいるのだ。

など。こうした、あふれんばかりの褒辞をみれば、陸機

の文学が当時でも、とくにおもんじられていたことが、すぐ推察されよう。これらの褒辞は、おそらく「文賦」に対しても、むけられていたのではあるまいか。

くわえて、右の褒辞でわかるように、陸機の詩文には、世評のたかい傑作がとくにおおい。「文選」をひもとくと、「歎逝賦」「樂府十七首」「挽歌詩」「擬古詩」「謝平原内史表」「豪士賦序」「漢高祖功臣頌」「弁亡論」「五等論」「演連珠」「弔魏武帝文」など、その分野やジャンルを代表するような傑作が、歴々としてならんでいる。「文選」採録数でみれば、陸機は謝靈運や曹植とならんで、ビッグスリーの一角をしめているのである。そうだとすれば、「文賦」を一篇の文学作品とみなした評言がすくないのは、内容が文学理論に属していて、やや特殊だったこと以外に、陸機の傑作がおおすぎたため、読者の注目や評価のことばが、ほかの傑作群に分散してしまったという事情も、また想定してよいだろう。

二 満腔の自信

では、陸機自身は自分の「文賦」を、いかに評価していたのだろうか。それははっきりしている。すなわち、文学理論の作としても、一篇の賦作品としても、いずれにしても満腔の自信をもち、後世にのこる傑作だとおもっていたに相違ない。どうしてそれがわかるかといえ、陸機自身が「文賦」中で、しばしばその旨をかたつているからだ。たとえば、

(9) 普辞條与文律、良余膺之所服。

「世情之常尤、
前修之所淑。」

(第十七段)

作文や修辞の法則を知悉することは、私がずつとこころがけてきたことだ。世人のやりがちなミスをよく研究し、先人の美点をみきわめてきた。

(10) 至於操斧伐柯、雖取則不遠、若夫隨手之變、良難以辭逮。蓋所能言者、具於此云。(序文)

斧を手にして「斧の柄にする」樹枝をきりとるとき、その手本「たる斧の柄」は遠方にあるわけではない。だが、そのさいの臨機応変の力の入れかたは、ことばではじつに説明しにくい。ただ、ことばで説明できるかぎりのことは、この賦中でいいつくされていることだろう。

(11) 綴下里於白雪、吾亦濟夫所偉。(第十段)

低俗な「下里」の曲を、高尚な「白雪」の曲につづけて奏したとしても、私だったら「下里」なりの美点をひきだしてみせるのだが。

などがそれである。まず(9)は、自分のこれまでの精進ぶりと、その結果としての自負心とを、さりげなく叙したものだろう。おなじようなことを、序文でも「私は才ある文人の作をよむごとに、彼らの創作上の心配りについて、自分なりに了解することがあった」(余每觀才士之所

作、窃有以得其用心)とたたており、「文賦」をかく以前に、そうとうの創作体験をかさねてきたことを示唆している。また(10)は、「文賦」をかきおわったあとの、能事をつくした満足感をかたつたものだろうが、これも自信にみちた発言である。さらに(11)は、一篇中に秀句があれば凡句でもすくうので、凡句もすてはならぬとたたつた箇所である。そこで陸機は、わざわざ「吾」字をだして、「他人ではできないだろうが、私だったら凡句の美点をひきだすことができる」といったげである。これも、自分の創作能力に自信がなければ、でてこない発言だろう。ここには、文学理論としての「文賦」もさることながら、一篇の文学作品としての自信も、さりげなくこめられているようだ。

さらに注目したいのは、序文中の

(12) 故作文賦、以述先士之盛藻、

「因論作文之利害所由。」

佗日殆可謂曲尽其妙。(序文)

そこで私は「文賦」をつくつて、古人の文藻がいかにつづられたかを叙し、また文の良否がいかに発生するかについて論じてみた。他日「後世の者は」、拙賦は創作の妙訣をのべつくしていると、いつてくれることだろう。

という文章である。ここで陸機は、自分の「文賦」が、

後世でもたかい評価をうけるだろうと予想している。なかでも「他日「後世の者は」、拙賦は創作の妙訣をのべつくしている」と、いつてくれることだろう」のことは、自分の賦に対する陸機の満腔の自信が、よくうかがえるではないか。

じつは、この部分は解釈がむづかしく、右の訳は、現代の徐復観氏の「古人が書物をあらわすや、よく知音の士を後世にもとめたものだ。そうだとすればこの句も、じつは（後世において、わが文賦はきつと創作の妙訣をのべつくしていると、「後人によって」たたえてもらえることだろう」という意味なのだろう」の意見にしたがっている。もしこの訳でたらしいのなら、陸機は、司馬遷が『史記』を完成させたときの述懐、「之を名山に藏し、副は京師に在らしめて、後世の聖人君子を俟つ」の事例を意識していたかもしれない。そうだとすれば、この賦には、よけいにつよい自負がこめられているとしてよからう。

もちろん、これとは逆に、自分の無能さをなげいた箇所もないではない。たとえば、

(13) 恒患「意不称物、蓋非知之難、能之難也。」

「文不逮意。」

(序文)

私がいつも困難を感じるのは、心情が対象にうまく一致せず、ことが心情を的確に表現できないこと。おもうに、創作では理論がむづかしいのではなく、

実践に困難があるのだろう。

(14) 「雖紛囂於此世、患絜餅之屢空、故踴躍於短垣、嗟不盈於予掬。」病昌言之難属。

放庸音以足曲。

「恒遺恨以終篇」「懼蒙塵於叩缶、豈懷盈而自足。」顧取笑乎鳴玉。

(第十七段)

かく世間に名文があふれているのに、それを私の手の中から、つくりだせないのが無念だ。とぼしい着想は途中でできえさり、よい表現もつづかない。だから短篇でも完成できず、つまらぬ字句でまにあわせるだけ。いつも後悔たらたらで筆をおき、心中に満足を感じることなど、あろうはずもない。「つまらぬ音しかだせぬ」缶をたたいては、塵がまいあがるのを、おそれ、玉磬のきれいな響きをだすひとから、嘲笑されるだけなのである。

(15) 「雖茲物之在我、故時撫空懷而自惋、非余力之所勦。」

吾未識夫開塞之所由。(第十九段)

靈感は自己の心中から発するが、おのが力でコントロールできるわけではない。だから、ときにうつろな胸をなでは、我ながら情けなくなってしまう。私は、靈感がわいたりわかなかつたりする原因が、よくわからないのだ。

などがそれである。ここでの陸機は、自信のなさを表白

しているかのようだ。しかしながら、これらの文をよくよんでみると、陸機だけにむつかしいのでなく、誠実な書き手であれば、だれにとつても（現代の我われにとつても）、困難を感じるような事がらだろう。それを陸機は、自分ではできない、自分にはわからない、と正直にのべているのである。このあたり、やや逆説的な言いかたになるが、なんら弁解や遁辞を弄することなく、できないものはできないと率直に表白できることじたい、むしろ自信のあらわれではないだろうか。

そうした「表面」自嘲、実質「自信」に類した事例として、創作法の説明困難さをかたつた第十六段があげられよう。その段のなかに、

(16) 譬猶

「舞者赴節以投袂、是蓋輪扁所不得言、歌者應絃而遺声。」

故亦非華說之所能精。

「一篇の繁簡の調整や構成のたてかたは」あたかも舞い上手が節にあわせて袂をふり、歌い上手が琴音に応じて声を発する「微妙で、口では説明しがたい」妙技と、よく似ている。こうした「歌舞や創作の」妙技のコツは、おそらくあの輪扁でもいいえぬことであり、口が達者なだけでは説明できぬものなのだ。

という一節がある。この十六段は、(10)の序文の「臨機応変の力の入れたは、ことばではじつに説明しにくい」

の発言を敷衍したもので、なにげなくよむと、創作法を説明できぬ自分の無能さを、自嘲しているかのようにみえる。しかし、この(16)の文をよくみると、伝説上の車輪作りの名人、輪扁をひきあいだして、「あの輪扁でもいいえぬことであり、口が達者なだけでは説明できぬものなのだ」といつている。これはむしろ、自嘲の皮をかぶった自負だとすべきだろう。それゆえ、自信のなさを表白しているようにみえる(13) (15)にも、やはり陸機の秘めた自信がよこたわっていると、推測してよからう。

このように、この「文賦」には満腔の自信がただよっている。しかしそれは、あたりまえのことであつて、そもそも自分の文才に自信がなかったら、陸機は「文賦」のごとき創作論をつづつたはずがないのである。そのあたりの作者の心理を、近時、斎藤美奈子氏が『文章読本さん江』（筑摩書房 二〇〇二）において、あざやかに指摘された。すなわち斎藤氏は、日本近現代の谷崎潤一郎や丸谷才一等の文章読本をとりあげ、文章指南書の執筆が、その道の達人だけに許された特別な事業であり、作者にとつて「文章読本を書く行為は、人生の総仕上げ、出世の証し、スゴロクの『あがり』」にも似た名誉ある行為」だった。そのためか、どの文章読本も自信にみち、なべて「ご機嫌」な雰囲気を読ませている——と喝破されたのである（四―一九頁）。

文章読本にはひとつの共通した雰囲気がある。ど

れもこれも「ご機嫌だ」ということである。終始一貫ニコニコ笑みふりまきつばなしの本もあれば、徹頭徹尾ブリブリ怒りまくっている本もある。が、それもこれもふくめて、「いよつ、ご機嫌だね、大将！」と思わず肩を叩きたくなるような雰囲気、文章読本にはただよっているのだ。(九頁)

こうした「文章指南の」作者の心理は、時空をこえて共通したものだとおもわれ、おそらく中国の三世紀にいた陸機にも、あてはまるのではないか。(10)や(11)での自信満々の発言はいうまでもないが、ほかにも(16)で自分を名人の輪扁になぞらえたり、(12)で「おそらく司馬遷の輩みにならつて」、後世にたかい評価をうけるにちがいないと、啖呵をきつたりしたもの、やはり同種のご機嫌な気分ゆえだったとかんがえられる。

このことの傍証になりそうなのが、この種の自信ぶりや、「その延長上にある」機嫌よさは、陸機だけにかぎられるのではない、ということである。それらは、同種の作をつづったときの六朝文人たちに、おおむね共通した気分であり、また雰囲気なのである。たとえば、文学批評の嚆矢といふべき「典論」論文をかいた曹丕は、同時代の文人を批評しながら、

文人相輕、自古而然。……夫人善於自見、而文非一体、鮮能備善。是以各以所長、相輕所短。里語曰、

「家有弊帚、享之千金」。斯不自見之患也。今之文人、魯国孔融文舉、広陵陳琳孔璋、山陽王粲仲宣、北海徐幹偉長、陳留阮瑀元瑜、汝南応瑒德璉、東平劉楨公幹。斯七子者、於學無所遺、於辭無所假、咸以自騁驥驟於千里、仰齊足而並馳。以此相服、亦良難矣。蓋君子審己以度人。故能免於斯累而作論文。

文人たちがたがいに輕侮しあうのは、むかしからよくあったことである。……ひとは、自分の長所をみせつけるのは得意だが、文学はひとつの形式にかぎらないので、どの形式でも上手にかける者はおおくない。そこでおのが得意なところで、他人の欠点をひなんしやすしい。俚言に「家にあるボロほうきでも、千金のお宝だとおもいこむ」とあるが、これは自分の能力を過大評価する欠点をいっただものだろう。

当代の文人としては、魯国の孔融あざなは文舉、広陵の陳琳あざなは孔璋、山陽の王粲あざなは仲宣、北海の徐幹あざなは偉長、陳留の阮瑀あざなは元瑜、汝南の応瑒あざなは德璉、東平の劉楨あざなは公幹があげられる。この七人は、学問において、おさめぬものはなく、文学についても、他人からの借り物などはない。彼らはみな、自分は千里に驥足をのばし、顔をあげ足なみをそろえて疾駆している、とおもいこんでいる。だから、たがいに他人を服従させることは、じつにむづかしい。

だが君子というものは、自己をよく認識したうえ

で、他人の能力を判断できるものだ。それゆえ君子だけが、たがいに輕侮しあう弊をまぬがれて、文学を論じることができるのである。

とたたっている。末尾の「たがいに輕侮しあう弊をまぬがれて、文学を論じることができる」君子というのは、もちろん自分（曹丕）をさしている。はるか年長の孔融や阮瑀をおさえて、「君子たる自分こそが公平に評価できる、いや自分にしかできぬ」といったげな発言は、「当時、魏の太子だった」曹丕のつよい昂揚感をしめすものだろう。曹丕の自信にみちたご機嫌な表情が、おもいようかぶではないか。

こうした昂揚感や自信は、六朝の沈約「宋書謝靈運伝論」や鍾嶸「詩品序」でも、うかがえる。この両篇はかつて拙稿「蕭統文選序の文章について」（『中国中世文学研究』五三号）でもひいたので、あらためて引用するのはひかえるが、沈約は「自分以前の文人はだれも声律に気づかず、私こそが発見したのだ。私の説があやまりだ」というのなら、後代の俊英の判定をまとう」といって、まことに意気軒昂だった。やはり曹丕と同種の、つよい自信がうかがえる。いっぽう鍾嶸も、同時期の都人士がおこなっている文学批評を、「きちんとした批評基準をもたぬ、かましい議論にすぎない」と痛烈に批判していた。この場合は、斎藤氏がいう「ブリブリ怒りまくっている」ケースに該当しよう。しかしそのブリブリの裏に

は、やはり「自分の詩品は、そんなお粗末なものとはわけがちがうぞ」という、ご機嫌な自信ぶりがこめられているよう。

ここではもうひとりだけ、『文心雕龍』をつづった劉勰から例をあげよう。劉勰は、『文心雕龍』本体の執筆完成後につづったとおぼしき序志篇において、

夫銓序一文為易、弥綸群言為難。雖復輕采毛髮、深極骨髓、或有曲意密源、似近而遠。……擘肌分理、唯務折衷。按轡文雅之場、環絡藻繪之府、亦幾乎備矣。但言不尽意、聖人所難、識在鉅管、何能矩矱。茫茫往代、既洗予聞、眇眇來世、尙塵彼觀也。

一篇の文章を評価するのはかんたんだが、おおくの作をトータルに論じるのは困難だ。末節の箇所はかるくあつかい、核心の問題はふかく論じたが、複雑かつ難解な部分では、わかりそうでも本質はつかみがたかった。……私は細部まで検討をくわえ、妥当な結論にちかづこうとつとめた。かくして文雅の世界をめぐり、文飾の秘府をさぐって、ほとんど周遊しつくしたといえよう。

だが、「言は意を尽くさず」とあるとおり、聖人でも文学の道はむづかしかった。まして私ごとき見識のせまい者が、文学の道をきわめられようか。とおい過去の文学については、私は「本書をかくことで」偏見をぬぐいさることができた。はるかな未来の世、

この書が後人の「高覧」に供されればさいわいである。

とたたっている。「一篇の文章を」以下で文学批評のむつきしさをかたり、また「私は細部まで」以下では、能事をつくしたという満足感を表明している（とくに「ほとんど周遊しつくしたといえよう」の箇所）。

ところで、これら劉勰の文章は、「文賦」中での発言によく似ているのに気づく。右の、文学批評（「文賦」の場合は創作）のむつきしさや、能事をつくした満足感の表白はもとより、『易経』繫辞上傳の典拠利用（言不尽意）

まで、「文賦」の内容をそっくりなぞったかのようだ。そういう類似のなかでも、私はとくに、末尾の「はるかな未来の世、この書が後人の「高覧」に供されればさいわいである」という発言に注目したい。ここでの劉勰の「はるかな未来」の具眼者をまつ云々のことは、「文賦」の⑫「他日「後世の者は」、拙賦は創作の妙訣をのべつくしている」と、いつてくれることだろう」とよく似て、おのが著述へのつよい自負をものがたつていよう。ここらあたりに私は、陸機や曹丕や沈約（沈約も「私の説があまりだ」というのなら、後代の俊英の判定をまとう」といつていた）と共通する、「機嫌な昂揚感や自信ぶりを感じるのである」。

ちなみに、陸機が、どういう事情で「文賦」をつづつたのかは、その創作時期もふくめて、現在でもよくわかっていない。³『文選』李善注に「臧榮緒晋書」をひいて、

「……「陸」機は情理を妙解し、心に文体を識る。故に文賦を作る」とあるが、これだけでは創作事情はさっぱりわからない。ただ、右の(9)（16）の発言や、「私は才ある文人の作をよむごとに、彼らの創作上の心配りについて、自分なりに了解することがあった」（序文）からみて、この賦がちよつとした気まぐれなどではなく、十全の準備や経験をふまえたうえで創作されたことは、じゅうぶん推測できよう。じつさいこの「文賦」中には、そうとうの創作体験をふまえないとべられぬような、老熟し、自信にみちた述懐がすくなくないのである。

くわえて、じゅうらいあまり問題にされてこなかったようだが、創作の意図や読者の想定、つまり「なんのために文賦をかけたのか」「だれを読者に想定していたのか」なども、考慮されるべきだろう。すると、たとえば「まだ世にでぬ二十そこそこの若造（陸機）が、年長者をさしおいて創作論をつづり、周辺の者に詩文の心得を伝授する」というようなことは、ちよつとかんがえにくい。そうしたことからしても、「文賦」の創作時期として、極端にわかいころは想定しにくく、やはり壮年以後におしあげるべきだろう。

この「なんのために？」「だれを読者に？」の問題をかんがえるとき、最近、興味ぶかい論文が発表された。それは、許結氏による「歴代論文賦の創生と発展」（『文史哲』二〇〇五—三）という論考である。この御論によると、後代の、文を論じた同種の賦（たとえば唐代の白居易

易「賦」など）は、しばしば科挙（つまり立身）との関わりでつくられているという。これはなかなかおもしろい指摘だともう。じつさい、唐の白居易にかぎらず、中国の文人はしばしば、文学をおおきく経世の問題（ちいさく限定すれば、自己の立身）とかかわらせて理解し、それに資するべく創作してきた。その意味で、「いかに詩文をつづるか」という文学上の問題においても、そのさきには、「いかに立身をとげるか」の現実的な課題が、みえかくれしていることがおおいのである。

都合のよい事例として、さきにも例示した劉勰『文心雕龍』のケースをみてみよう。「文賦」の影響をうけた、この壮大な文学理論の書物をかきあげたあと、劉勰はどのような行動をおこしたのか。彼はつぎのような行動をおこしたのだった。

既成、未為時流所稱。勰自重其文、欲取定於沈約。約時貴盛、無由自達。乃負其書、候約出、干之於車前、狀若貨鬻者。約便命取読、大重之。謂為深得文理、常陳諸几案。（『梁書』卷五〇劉勰伝）

『文心雕龍』を完成させたが、まだ当時の人びとから称賛されなかった。勰はこの書に自信をもっており、「当時の大御所だった」沈約からの評価をえたいとおもった。だが沈約は当時、高貴な地位についていて、勰にはあう手づるがない。そこでみづから書物を背おって、沈約をくるのをまちうけ、その馬車

の前で披見をもとめた。その格好は物売りのようだった。沈約はすぐにその書をうけとらせて一読し、おおいに珍重した。そして、この書をふかく文学の道理に通じたものとし、つねに自分の机上においたのだった。

劉勰はなぜ、物売りのごとき格好をしてまでも、沈約の馬車をまちうけ、その披見を乞うたのか。もちろん、おのが書の価値をみとめてもらって、「当時の人びとから称賛され」たかったからだろう。しかし、この場合の称賛とは、文学上での称賛だけを意味するわけではない。そのさきにはとうぜん、この書によって仕官のチャンスがうかがおうとする企図が、存していたとかんがえねばなるまい。『梁書』劉勰伝は、このエピソードと仕官との相関を、明確にはかたっていない。だが実際上は、この沈約への売りこみが成功したのち、仕官の道は急にひらけていった。そして梁の天監中にいたって、勰は東宮の通事舎人となることができ、好文の皇太子、蕭統の側にはべる榮譽をえたのだった。

この『文心雕龍』の創作意図について、劉勰は序志篇で、大要つぎのようにいう。いわく、文学の効能たるや、經書の枝というべきものであり、五礼や六典はこの文学によつて運営され、ただしき君臣関係や軍国案件は、經書によつて効果があるのだ。だが現在は輕薄な文風にながれて、文学の正道からはなれてしまっている。我わ

これは、経書の『書経』や『論語』にかかれた文学の教訓を、よく体得しておかねばならぬ。そこで私は筆をとり墨をふくませて、ただしき文学のありかたを論じてみた——と。かく高尚なことをいうだけで、劉勰は俗っぽい仕官の希望などについては、ひとこともふれていない。しかし、そうではあるが、この書をかきあげたあと、彼がじっさいにおこした行動は、右のごとき売りこみ工作だったのであり、そして現にその結果、理想的な立身をはたしたのである。

この劉勰『文心雕龍』の事例や許結氏の御論を参考にすれば、陸機の「文賦」も、純粹な芸術至上主義ふう立場からかかれたのではなく、世俗的な立身との関わりでつづられたのではないかという推測は、じゅうぶん可能だろう。「文賦」と『文心雕龍』との相関は、なにも文学上の知見だけに限定しておく必要はあるまい。もともと陸機についていえば、劉勰とはちがって物売りの真似をすることもなく、上洛後すぐ張華の知遇をえて、比較的スムーズに立身の道をきりひらくことができた。すると、もし「文賦」が「壯年以後に」立身との関わりでかかれたとすれば、それは陸機自身ではなく、むしろその周辺の者のためであった可能性がたかい。そうだとすれば、もつともかんがえやすいのは、呉出身の後輩の立身を後押しするため、創作の指南書として「文賦」をつづったという事情だろう。

右のような想定をふまえたうえで、以下、陸機の「文

賦」執筆をめぐって、放恣な想像をめぐらせてみよう。すると、上洛後の陸機は、書簡文をつかつて、弟の陸雲と創作に関する諸問題を、議論していたことがわかつている。そして、その陸兄弟の周辺には、おおぜいの呉出身の有為な若者が、「敗亡国からの移民であることによつて」仕官をはたすすべもなく、むなしくとごろをまいていたことだろう。陸兄弟が詩文の腕で立身したことをしる彼らは、そうした兄弟のやりとりをして、「士衡どのの創作の秘訣を、ぜひ我らにもおしえてください」とたのむこともあったのではないか。かくして陸機は、後輩たちの懇請におされるようにして、「では、お役にたつかどうかわからぬが、ひとつなにかいて進ぜようか」などといったながら、指南書の想をねりはじめた……。

「文賦」の創作事情をこのように想像するとき、陸機はしづしづ筆をとるところか、曹丕や劉勰がそうだったように、上機嫌かつ意欲にみちて筆をとったにちがいない。なにしろ陸機にとつても、「文章読本を書く行為は、人生の総仕上げ、出世の証し、スゴロクの『あがり』にも似た名誉ある行為」だったにちがいないからだ。しかもその創作が、後輩たちの立身に役だつかもしれぬとあつては、なおさら力がいろうというものである。じっさい、そうした状況を想定することによつて、「文賦」の文章や内容がかんがえるうえで、いろいろと得心させられることがすくなくない。

たとえば、なぜ作品批評でなく、創作法を主としたの

か。なぜ不便な賦ジャンルを採用したのか。なぜ華麗すぎるほど修辭をこらしたのか。なぜ潔癖すぎるような主張をしたのか（たとえば第二・九段で、模擬的創作を禁止するなど）——などの疑問も、「吳出身の後輩の目を意識したから」の一言で、ほぼ説明がつくようにおもふ。つまり、後輩の立身の一助にするわけだから、創作と直接に関係せぬ作品批評などでなく、じつさいに役だつ創作法を主内容にする必要があつたのだろう（もつとも、陸機の觀念ずきの性格もあつて、「文賦」中の創作法は抽象的すぎて、じつさいには役だたなかつたろう）。また後輩の目を意識すればこそ、ふつう想定される論や書簡文のジャンルでなく、押韻や句形などの拘束がおおい賦ジャンルをあえてもちい、必要以上の華麗な比喻や対偶を駆使し「て、後輩たちの度肝をぬこうとし」たのではないか。さらに、「出世の証し、スゴロクの『あがり』にも似た」名譽ある行為だつたので、先輩としてちよつときどつたこともいいたくなつた。そのため、模擬的創作の禁止などという、極端なことでもないたのではないだろうか。

三 豊麗な語彙

さて、陸機「文賦」への評価でずいぶん手間どつてしまつたが、この章からは、いよいよ「文賦」を一篇の賦作品とみなし、その文章の特徴を考察してゆきたいとおもう。まずは「文賦」の語彙からみていこう。

「文賦」中の語彙の特徴として、三点ほどあげられそうだ。まず第一点は、前漢以前にはみられなかつた新語が、多用されていることである。この新語については、吉川幸次郎氏が論文「六朝文学史研究への提議一則」（全集第二五卷）において、大要つぎのように指摘された。すなわち、六朝をふくむ中世の時期では、四六句を多用した四六駢儷文が流行したが、その構成要素となるものは、二字による聯語である。その聯語にはしばしば、前漢以前には用例をみいだせぬことばがみえ、おそらく六朝期に発生した新語だろう。そしてもうひとつ、それに準じるものとして、新意を充入した語がある。たとえば「斯文」の語は、『論語』において文明一般の意で使用されていたが、六朝では、文学の意に限定して使用されている。これは、おなじことばであつても、もとの典拠とは意味がずれた使用法であり、いわば新意が充入されたものといえよう。六朝には新語とともに、こうした新意が充入された語も、また多用されている——と。

ここで指摘された新語は、吉川氏も指摘されるように、六朝の詩文に共通してみられるものである。その意味で

は、陸機「文賦」に特有のものではない。だが問題は、その使用による効能いかんということだろう。私見によれば、「文賦」の文章は、この新語の活用によって、いちじるしく斬新にして豊麗な印象が、増強されているようにおもう。

ここでは、わかりやすい例として、第一段中の「悲落葉」以下の叙述をあげてみよう。

「悲落葉於勁秋、心懷慄以懷霜、喜柔條於芳春。」

志眇眇而臨雲。

「詠世德之駿烈、遊文章之林府、誦先人之清芬。」

嘉麗藻之彬彬。

慨投篇而援筆、聊宣之乎斯文。

きびしい秋の時節には落葉をかなしみ、かぐわしい春の時節には柔枝をたのしむ。心をひきしめては、霜の潔白さをおもひ、志をたかくもつては、雲の気高さにたちむかう。そして、徳望たかき古人の功業を「たたえた詩文を」詠じ、先人の高潔な人格を「たたえた詩文を」口ずさむ。また文学の宝庫をさまざま、文質彬彬たる文藻をめでたのしむ。

かくしていると、ひとは書物をなげすめて手に筆をとり、胸中の想いを文辞にのべようとするのである。

ここには、現代の我われに、とくにむつかしく感じら

れる語句はない。だが当時の人びとには、おそらくこの部分は斬新にうつり、また陸機らしい行文だと感じられたことだろう。というのは、ここの「落葉」「勁秋」「柔條」「芳春」「懷霜」「臨雲」「林府」「麗藻」「投篇」などは、どれも六朝にはいつてから創案された新語であり、しかもそれらは陸機ごのみの語彙だったと想定されるからだ。たとえば「勁秋」や「芳春」などは、現代の我われからみれば、「春」「秋」に、形容詞ふう修飾語をくわえただけの、なんの変哲もない語のようにつる。だが、これらの用例を検してみると、この「文賦」以前にはみつからなく、おそらく陸機がはじめてつかった語だろう。くわえて、いささかの調査をしてみると、この両語は陸機の「幽人賦」に、

「勁秋不能凋其葉
芳春不能發其華

きびしい秋の時節でも葉をしぼますことはできず、かぐわしい春の時節でも花をさかせることはできない。

とあり、さらに陸機「長安有狎斜行」にも、

「烈心厲勁秋
麗服鮮芳春

烈士の精神は、きびしい秋より強固であり、美しい

服装は、かぐわしい春より鮮烈である。

と使用されていることに気づく。つまり、この両語は新語であるとともに、陸機ごのみの語でもあつたらうと推測できるのである。

その他、右の引用文中の語彙でいえば、「懷霜」の語も、陸機の「祖德賦」に、

「形鮮烈於懷霜
沢温恵乎挾纈

外面は霜をいだくような、すばらしき高潔をたもち、内面は綿でくるむような、あたたかい慈悲心をもっていた。

と使用され、また「臨雲」の語も、陸機の「演連珠」に、

臣聞「利眼臨雲、不能垂照、
朗璞蒙垢、不能吐輝。

私は「日月も雲をまえにすれば、地上をてらすことはできず、宝玉も汚れがつくと、輝きをはなつことはできない」ときいている。

とつかわれており、これらも陸機ごのみの語だったとかんがえてよからう。

ところで、そうした斬新な語が多用された結果、陸機

の詩文は、また豊麗な印象もおびるようになった。つまり、「秋」を「勁秋」に、「春」を「芳春」に潤色しただけで、その語は、いっきに豊麗さをまして、詩的な雰囲気をただよわせてくるからだ。秋は勁秋になることによって、ただの秋ではなく、秋霜烈日のきびしさをふくんだ文学的な語にかわるし、春も芳春となることによって、花さき鳥なく駘蕩たる春イメージをただよわす。それは、「葉」を「落葉」とし、「條」を「柔條」とかえたばかりでも、おなじである。わずか一字であつても、それによつて豊潤にして華麗な印象がただよってくるのだ。

こうした用語のくふうと、それによる斬新にして豊麗な印象とは、精細に用例を検討し、吟味しないと気づきにくいし、また気づいたとしても、すぐには感得しにくいことだろう。それでも、現代の我われが「文賦」をざっと一読しただけでも、漠然と感じられる斬新かつ豊麗な印象は、こうした用語に起因していることを、まずは指摘しておきたいとおもう。いっぽんに、六朝の詩文とくに陸機以後の詩文に、この種の「斬新にして豊麗な印象をあたえる」新造の語が多用されるのは、めずらしいことではない。だが、陸機のばあいには、とくに「勁秋」「芳春」のような季節感に關した語や、「後述する」文学・修辭關係の用語に、その創意が発揮されているように感じられる。そうした傾向は、陸機文学固有の特徴なのか、それとも六朝語彙の全体的傾向の一端にすぎないのか、現在ではなお判断がつかない。後考を期したい。

さて、「文賦」語彙の二番目の特徴として、吉川幸次郎氏が指摘された、新意を充入した語の多用があげられよう。これらは、語じたいは従前も使用されていた旧套の語彙だが、その内包する意味あい、従前とことなってしまうということばだった。

ここでは、第五段中のジャンル創作法を説明した箇所をあげてみよう。

「詩縁情而綺靡、碑披文以相質、銘博約而溫潤、賦体物而瀏亮。」
誅纏綿而悽愴、箴頓挫而清壯。

詩は感情にそいつつ華麗に表現すべきであり、賦は事物を模写しつづつ明瞭につづらねばならない。碑は文飾をくわえて質実さをおぎない、誄は思い綿々として悲愴でなければならぬ。銘は多彩な内容を簡約につづつて温和さをたもち、箴は婉曲に訓戒しながらも清壮にかくべきだろう。

詩ジャンルについて叙した第一句「詩縁情而綺靡」中の、「縁情」の語に注目しよう。この語は周知のように、政教にかかわった倫理的な「言志」と対応し、感情の自然な発露を重視する意で理解されている。ところがこの語、陸機以前に使用されなかったが、それはたとえば、魏の曹羲「申蔣濟叔嫂服議」に、

縁情制礼、不必同族。

人情にしたがつて礼をさだめるべきであり、かならずしも同族でなくてもよい。

とあるような使用法なのである。これによると、「縁情」の語はどうやら、漠然と「人情にしたがう」ぐらいの意にすぎなかったようだ。そうした「縁情」の語に対し、陸機は詩創作の動機に限定して、「感情によりそう」意を充入したのである。陸機は、かく新意を充入した語でもって、じゅうらい常識だった「詩は志を言う」の考えかたに修正をくわえようとしたわけだ。この陸機のくふうによって、「縁情」の語は、いわばあらたな生命をふきこまれたのである。

おなじようなことが、賦ジャンルの創作法を叙した「賦体物而瀏亮」中の、「体物」の語についてもいえる。この語も、もとは『礼記』中庸に、

鬼神之為徳、其盛矣乎。視之而弗見、聴之而弗聞、体物而不可遺。

鬼神の徳たるや、なんとすばらしいことか。目をこらしてもみえず、耳をすませてもきこえないが、万物を生成して欠けることはない。

とみえていて、鄭玄は「体、猶生也」と注している。すると「体物」の語は、ほんらい「万物を生成する」の意だったようだ。それを陸機は、含意を大幅にかえて、「事

物を描写する」の意で使用したのである（現代の『漢語大辞典』には、「体」に「体现 模状」の意があるとする。その意が、ここでの「体」の意にちかかろう）。

この部分、李善は「賦は以て事を陳ぶ。故に（物を体す）と曰う」と注するだけで、中庸の用例をしめしていない。それは李善の慧眼だとすべきである。私の推測では、おそらく李善は、中庸の用例はひくべきでないとは気づいたものの、しかしではなにを提示すべきかは、おもしろいかなかったのだらう。そこでしかたなく、当時ふつうにいわれていた「賦は事物を鋪陳する」の解釈を逆用して、「体物」を「事物を陳述する↓事物を描写する」の意だと推測したのでらう。もし陸機以前に、「事物を描写する」の意で「体物」を使用した用例があったならば、李善がここにひかぬはずがないので、おそらくこれも、陸機が独自に新意を充入したのに相違ない。

もうひとつ例をしめせば、銘ジャンルについてのべた「銘博約而温潤」の「博約」の語である。この語は、一見すると『論語』雍也の、

子曰、君子博學於文、約之以礼、亦可以弗畔矣夫。
孔先生はいわれた。君子ははびろく学問し、その学問を礼で統括せねばならぬ。それでこそ、道にそむくことがなくなるのだらう。

をふまえ、「博文約礼」の省略形、つまり「ひろく学問し、

それを礼で統括する」の意かとおもわれそうだが、これも、李善注が『論語』の用例をあげず、「博約は、事博く文は約やかなり」と釈義で解説するように、『論語』の使用例とは関係なく、独自の新意（事がらひろくとりあげるが、文章は簡約につづる、の意）が充入された語なのだ。その他、新意が充入された同種のことばは、さきの「警策」の語をはじめ、「放言」「闕文」などすくなくないが、それらは前稿でもふれたので、挙例はここらあたりでとどめる。

ここまであげた新語と、新意を充入された語、現代の我われは、李善注をはじめとする諸注釈があるので、なんとか意味を推測できなくはない。だが、当時の読者は、用例がおもしろいかなかったらうし、またおもしろいとしても、旧来とちがった意味でつかわれているので、真意にたどりつくのは困難だったらう。このことは、逆にいえば、陸機が「文賦」を叙するのに、できあいの語をお手がるにつかつたのでなく、みずから斬新な語彙をくふうして、意欲的に表現しようとしたことをしめしている。このあたり、完成した「文賦」をしめしながら、「どうだ、わかったか。こんな造語のしかたもあるし、旧套の語でもこんな使いかたもできるんだぞ。よくおぼえておけよ」と呉国の後輩に、とくとくと教示している陸機の「ご機嫌」な顔を想像するのは、いささか放恣すぎるだらうか。

さて、「文賦」中の語彙の三番目の特徴として、双声、

疊韻の語を多用するということもあげておこう。右にあげたジャンル創作法を説明した第五段の文章を、もうすこしおおめに引用しよう。

| | | |
|--|--|--------------------|
| 詩緣情而綺靡、 賦體物而瀏亮、 頌優游以彬蔚、 論精微而朗暢、 | 碑披文以相質、 誄繼綢而悽愴、 奏平徹以閑雅、 說煒曄而諛誣、 | 銘博約而溫潤、 箴頓挫而清壯、 |
|--|--|--------------------|

右で——線を付した語は双声であり、——線を付した語は疊韻である。「文賦」では、ほかの箇所でも双声と疊韻の語がしばしばみえるが、この部分がとくに多用されている。これらは偶然に使用されたのではなく、陸機の意図したものだったろう。これらのことばは、口調をよくするのはとうぜんとして、それ以外に、なにか特別の修辭的意図を秘めているのだろうか。とくに右のうち、第一聯の「綺靡——瀏亮」と第三聯の「溫潤——清壯」とは、双声と疊韻とを、また第五聯の「閑雅——諛誣」は双声どうしを対応させている。これは意図的なものなのだろうか。

さらに、対偶中で音声に対応させた同種の文章として、たとえば第十九段の

「兀若枯木、攬宮魂以探頤、
理翳翳而愈伏、
豁若涸流、頓精爽於自求、
思乙乙其若抽。」

枯木のように動きがとまり、涸流のように空虚そのものになる。おのが詩魂をばげまして精神の深奥をさがり、心をおちつけて靈感をもとめるが、構想はうすぐらく奥へ奥へと沈潜してゆくばかり、よき思念もわいてこず、内部からくみあげることもできない。

がある。これを見ると、「兀——豁」「翳翳——乙乙」などでも、音声対応が意識されていたようだ。

これらの諸例は、唐代の『文鏡秘府論』東卷「二十九種対」では、対偶技法の一環として、賦体対、双声対、疊韻対などとよばれている。また同書天卷「七種韻」では、押韻技法の一環として、疊韻の語どうしによる押韻を「疊韻」と称し、「此れを美なりと為す」とのべている。すると右の「綺靡——瀏亮」なども、意図的に「美なり」となることをねらったものであり、そうでないのは、その意図を完遂できなかったものなのだろうか。

もとより賦ジャンルには、司馬相如のころから、擬声語や擬態語などを多用する習慣があった。漢賦の作者たちは、そうした音声の工夫に心血をそそいできたのである。「文賦」中での双声疊韻の多用は、そうした習慣の延長上のものにすぎないのか。それともなにか、六朝期特有の意図があつてのものなのか。この「文賦」中の音声的くふうに、どんな修辭的達成がなされており、どんな歴史的意義があるのか等々、疑問はつきない。だがざん

ねんながら、音韻学の素養にとぼしい私には、これらへの回答をしめすことができない。博雅の士のお教えをたまわれば、さいわいにおもう。

(つづく)

注

(1) 「文賦」研究史を叙した最近の論文として、本文であげたもの以外に、つぎのようなものがある。その内容はおおむね、本文であげた李氏の論と大同小異である。『20世紀中国古代文学研究史・文論卷』三二八―三二六頁(東方出版中心 二〇〇六)、李天道「20世紀文賦研究述評」(『文学評論』二〇〇五―五)、趙豊君・徐愛国「文賦研究二十年的回顧与反思」(『山東電大学報』二〇〇一―四)。

(2) 「文賦」を一篇の文学とみなした評価も、わずかながらないではない。たとえば『文心雕龍』詮賦篇に、

士衡子安、底績於流制。

陸機(文賦をさす)と成公綏(なにをさすか未詳)とは、文学のジャンル方面の賦で業績をのこした。

とある。ここは魏晋の代表的な賦を列挙している箇所だが、どうやら「文賦」がとりあげられているようだ。このことは当時、「文賦」が陸賦の代表作とみなされていたことを暗示しよう。さらに「陸機の弟の」陸雲の手になる兄の機への書簡文「与平原書」其八に、つぎのような文辞がみえる。

文賦甚有辞。綺語頗多、文適多体、便欲不清。不審兄呼爾不。

兄さんの「文賦」は、ひじょうに表現ゆたかな作です。ですが、綺麗な語がおおすぎ、文体も多彩ですので、清でなくなりそうです。兄さんはそうお思いになりませんか。

この文は、「文適多体、便欲不清」の解釈がむづかしく、正確な意味がとりにくいものの、「文賦」を一篇の文学とみなして、好意的な評価をくだしたものにはちがいない。その点では、「文賦」評価史のうえで重要なものになるはずだ。ところが、この文については、冒頭の「文賦」は文章詩賦の意の普通名詞であり、「文賦」をさすのではない、という解釈もあつて、現在でも研究者の意見が一致していない。くわえて、実の弟からの好意的な批評ということもあつて、客観性という点でも、いささか問題があるといわざるをえない。

(3) 「文賦」の創作時期をめぐっては、大別すれば、入洛前の二十代にかかれたとする説と、入洛後の四十代(陸機は四十三歳で逝去したので、晩年になる)にかかれたとする説との、ふたつの意見がおこなわれている。前者は、杜甫の「陸機二十作文賦」の詩句(醉歌行)にもとづくもので、姜亮夫氏や張文助氏らが主張されている。後者は注2でもあげた「与平原書」其八の記述を論拠とするもので、遼欽立、陸侃如、周助初、陳世驥の諸氏がこの説を持しておられる。

さらに近時、この両者を折衷するようなかたちで、「二十代にいちおうの草稿がかかれ、晩年までそれに修改の手をくわえつづけた」とする説も提起されている。佐藤利行「文賦の成立過程について」(『安田女子大学大学院開設記念論文集』

一九九五）、鍾新果「文賦写作年代新断」（『中国韻文学刊』

二〇〇九—二）などである。

この折衷説は、いっけん妥当かのようにみえる。しかし、「出版による公表」という明確なメルクマールがなかった当時、未定稿と決定稿とをどこでどう線引きするかは、実際上はなかなか困難なことだろう。くわえて、修改ということをいいだすと、作者が死なないかぎり、当時の作品はすべてワーキンプログレスの途上にあつた、ということになりかねない。